



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	質的研究論文の書き方のヒント(fulltext)
Author(s)	朝倉,隆司
Citation	日本健康相談活動学会誌, 10(1): 13-20
Issue Date	2015-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2309/139331
Publisher	日本健康相談活動学会
Rights	本論文の著作権は『日本健康相談活動学会』にあります。 。

特別寄稿

質的研究論文の書き方のヒント

東京学芸大学 教授
朝倉隆司

Clues to Writing a Qualitative Research Paper

Takashi ASAKURA

キーワード：質的研究、ガイドライン、研究論文、ヒント

Key words : qualitative research, guideline, research paper, clues

I はじめに

「質的研究を書き上げる経験は、量的研究を書き上げるのとは、かなり異なった経験」である¹⁾。確かに、量的研究の論文は、数値化されたデータを統計的に分析して、それをもとに論文や報告を書く。基本的に、量的データは統計的には様々な性質があるにしても、所詮数値データである。演繹的思考なので、結果や結論の概要は研究開始時から研究者の頭と研究デザインの中に存在している。したがって、論文のスタイルは、標準化されやすい。それでもなお、社会科学系の健康を扱う学術雑誌と自然科学系のそれでは、イントロダクションの書き方や論文の長さなどが異なる。

それに対して、質的データは、代表的なのは文字であるが、映像、画像、音など幅広い。読者の多くは、インタビューを文字化したトランスクリプトを分析して、解釈し、論文を書くことを思い浮かべるかもしれないが、質的研究で得るデータはもっと多様で複雑である。さらに、質的研究は、それぞれの研究方法を採用する際に、どのように現象を認識するか、その哲学的、認識論的立場によって多様性に富んだアプローチが生まれている。もちろん、全くバラバラではなく、質的研究アプローチの間に一定の共通性も認められてい

る。すなわち、自然主義的、プロセス重視、帰納的、意味への注目の4点である²⁾。

いずれにせよ、質的研究の論文や報告の表現形式は、データの多様性・複雑性を鑑みれば、もっと柔軟で、多様であるべきかもしれない。今のところ、多くの質的研究の論文は、コード、概念とカテゴリーで満ちている。科学的でない、あるいは厳密ではないとの批判もあろうが、解釈を中心としたエッセイのようなスタイルの質的研究論文もありうるのではないか。仮説を検証する量的研究とは違って、新しい理論、あるいは仮説を生成するという質的研究の性質から考えると、既成の枠にとらわれず、研究者の想像力と質的研究の柔軟性がもっと生かされる論文スタイルが探究されてよいと思う。

また、書くことそのものが質的研究を行うプロセスの一部である。したがって、量的研究とは異なり、完全にデータを収集し、分析が終わってから書き始めるのではなく、できるだけ早く書き始め、書くことで社会的なイマジネーションが高まってくる。書くのは、ちょっとした分析や解釈のアイデアのメモでもよい。質的研究では、書くことが、分析であり、解釈につながる。何はともあれ書くことである。

II 書くための準備と書き始めるとき

ところが、誰もがそうだと思うが、論文を書かなければならないと思っても、その気になれず、なかなか速やかに取り掛かれない。さあ書くぞと気持ちが盛り上がってくるような準備を必要とする。どうでもいいようなことだけれど、案外大切なことだと思う。机を整理するなど環境を整える人もいれば、必要な資料をすべて周りに用意する人、何か道具にこだわる人もいる。著者の場合は、頭の中でおおよその筋書きを立てつつ、書くぞという気持ちを高めるとともに書けそうだという自己効力感を高めていく心の作業をいつも必要としている。その時々によりかける時間は違うが、一週間かそれ以上前から気持ちを整えていく。物理的よりも心理的な準備をしている。また、いつまでに書き上げるという期限を決めて自分を追い込むのも一つの方法である。

そして、論文を書き始めるときには、文献の引用といえば聞こえはいいが、要するに先行研究の真似をしながら、あるいはかなり取り込みながら書き始めていくことも多い。しかし、そのうち、自分の本当に言いたいこと、自分の研究の文脈が明確になるに従って、それらは書き換えられていく。繰り返し推敲し、深く考えるうちに、再構築・再構成されて元の形はなくなっていくか、適切に収まるものである。

さて、書くためのより実践的な準備としては、以下の点が指摘されている¹⁾。

- まず、項目立てなど論文の全体的構成をできるだけ細かく決める。
- イントロダクションから書き始めるのではなく、書きやすい箇所、自分の発見がある箇所から書き始める。そうすることで、イントロダクションに含めるべき文献や目的までの文脈づくり、この論文が貢献すべき研究領域（すなわち研究の意義や目的）がよりはっきりする。
- 論文の読者を想定し、心の中で対話する。その読者にわかりやすい文章表現、ひいて

は論文を書くよう心掛ける。

- 書き始めたら、できるだけ毎日、何らかのアイデアや一文でも書き続けるようにする。そのためには、形式的な文章でなく、自分が書きやすいスタイルで書けばよい。
- 期日の目標を決めて書く。一気に書き上げなくとも、細かくセクションごとに期日を設定して、こつこつと書き進めればよい。

さらに、上記に加えるとすれば、自分の研究上のメンターや指導者がいる場合は、その人だったらどのように分析し考察して、書くかを考え、心で対話しながら書くといよい。このことは案外重要で、自分の内面に「研究者的資質を育てる」こととも関連してくる。新しい研究方法に関する言葉の使い方や思考方法を獲得するには、他者の立場（ここでは研究上のメンターや指導者の立場）に立って理解したり考えたり表現する「研究的な役割取得 (role taking)」が、論文を書く上でも重要な機能を持っている。直接的な研究上の指導者でなくてもよいので、目標や手本となる人を心に持っておくとよい。

また、推敲時に言い過ぎは修正すればよいので、気持ちが萎縮しないように、要するに何が言いたいのかを明確に表現するよう心掛けるとよいと思う。

III ガイドラインを踏まえて書く

とはいうものの、そう簡単には書けない。しかも、質的研究は、決して“お手軽な”研究方法とは言えない。質的研究の特徴のひとつは、時間と忍耐を要する仕事 (time-consuming) なのである。さて、質的研究論文では、いったい何をどのように書けばよいのだろうか。そこでいくつかの学術雑誌が公表しているガイドラインにそって書くポイントを解説してみたい。また、書き方のポイントは、即研究の進め方のポイントでもある。

質的研究のガイドラインは、BioMed Central (BMC)、Social Science & Medicine、American Journal of Pharmaceutical Educationなどい

くつかのジャーナルがウェブで公開している。ジャーナルの著者向けのガイドラインなので、その雑誌の目的や特性を反映したものになっている。しかし、論文を公表する際には、必ずいずれかの雑誌を選択してその規定に合うように書かなければ採用されないため、参考にすべき基準である。ちなみに、BMCのQualitative research review guidelines—RATS³⁾では、「この点を投稿原稿で確認しよう (Ask this of the manuscript)」と「この点は原稿に含まれていなければならない (This should be included in the manuscript)」に分けて説明されている。ちなみにRATSは確認すべき観点の頭文字である。Rは研究疑問の適切さ (Relevancy of study question)、Aは用いた質的研究方法の妥当性 (Appropriateness of qualitative method)、研究手順の透明性 (Transparency of procedure)、解釈的アプローチの健全さ (Soundness of interpretive approach) である。

The International Journal of Tuberculosis and Lung Diseaseも質的研究の成果を投稿しようとする著者が原稿を用意する際にチェックすべき点をウェブで公開している⁴⁾。Social Science & Medicineも同様に質的論文のガイドラインをウェブで公表している⁵⁾。これら2誌とAmerican Journal of Pharmaceutical Educationは、目的、方法(対象者選択、研究プロセス、倫理)、分析、結果の提示(文脈の明確化、データの提示)といった論文構成に従ったガイドラインとなっている。日本健康相談活動学会誌においても、これらの公表されている投稿原稿に関するガイドラインを参照して、より詳しい投稿規定や査読要領を作成することが望まれる。

ここでは要点の分かりやすさからAmerican Journal of Pharmaceutical Educationが執筆者と査読者向けに公表しているチェックリスト(表1)を紹介し、解説をする⁶⁾。この雑誌のチェックリストを選択したのは、単に投稿規定の付録のような形でガイドラインが示されているのではなく、特別論文としてより詳細に解説されているからで

ある。

まず、どのような媒体に、誰に向けて書くのか、読者とスタイルを明確に意識して論文あるいは報告を書く必要がある。同じ質的研究による論文でも、保健医療系のように自然科学を中心とした分野では、より自然科学系スタイル、論調や論理展開が期待されるだろうし、より短くまとめる必要がある。心理学系や社会学系では、より多様性や多義性を前提とした解釈的論述を重視する文科系スタイルやストーリー展開が期待され、長い論文が許容される。

論文タイトルは、表1にはないが、その論文が何に関する研究であるか、いくつかキーワードを使ってエッセンスを表したものである。質的研究であることが明確にわかるようタイトルをつける。

はじめに(イントロダクション)では、論文全体のアウトラインを要約的に示すセクションであり、研究疑問が明確に述べられており、その研究疑問を立てる正当性、特定の質的研究法を選択した適切さ(正当性)が述べられる必要がある。また、適切な文献を引用して、その研究トピックの背景が理解できるような情報を提供する必要がある。もし、理論的なフレームワークがあるなら、それも示す必要がある。質的研究では、文献検討や理論的探索を後回しにして、データ収集の際に先入観を持つのを避ける場合があるが、少なくとも論文を執筆する際は、このセクションで既存の社会理論などとの関連付けを行うべきであるし、現象をどのように認識するのか、研究者の立場を明確にする必要もあろう。ちなみに、著者は、たとえ質的研究であっても、何の予備知識やフレームワークも持たずにデータ収集するのは無謀であると考えている。この点に関しては賛否両論あるだろうが、一定の理論的フレームワークや知識があつてこそ、現象を焦点化して捉えることができ、概念が生成しやすく⁷⁾、オリジナリティも主張しやすいのではないかと。ただし、囚われすぎると新たな理論の生成(むしろ仮説的な理論生成が

表 1 著者と査読者のための質的研究論文のチェックリスト

はじめに

- 研究疑問が明確に記述されている
- 研究疑問の正当性が示されており、既存の知識体系（経験的研究、理論や政策）と関連付けられている
- 原稿で後に述べられる、本研究に特有な用語や教育用語が定義されている
- 倫理的な同意や研究機関等の研究倫理委員会の承認が得られたプロセスを記述し、引用している

方法

- 特定の研究方法を選択した理由が記述されている
- 研究への参加者を選択した基準が説明され、その正当性が述べられている
- 対象者をリクルートした方法が明確に記述されている
- 研究にどのような人が参加しないと選択したか、それはなぜか、詳細が示されている
- 研究のサンプルと研究の場（セッティング）の特性が記述されている
- 参加者からインフォームドコンセントを得た方法が記述されている
- 対象者の匿名性と秘匿性の保障について記述されている
- データの記録の方法（たとえば、録音や録画）とデータを文字に起こす方法が記述されている
- 方法の概要が記述されており、例示がされている（たとえば、インタビューガイド）
- データ収集を終わらせる決定について説明されており、正当性が述べられている
- データ分析とその検証について、誰がその分析を行ったかを含め、説明されている
- データからテーマと概念を見つけ出したり、推定する方法が説明されている

結果

- 読者に、解釈がデータによって支持されるか否かを評価するだけに足る、十分なデータを提示している
- 中心的な解釈に適合しない周辺（外れ）の事例や否定的あるいは逸脱した事例が提示されている
- 研究結果を他の場（セッティング）に適用することが可能か、考察されている
- 同様の先行研究や社会理論の文脈に位置付けて、結果が提示されている

考察

- 考察は、質的研究論文ではしばしば結果の中に組み込まれている
- 既存の文献からの考察とこの研究がどのようにこの分野に貢献するのかが、含まれている
- この研究の独自の強みや限界が考察されている
- 研究者がどのようにして結果にバイアスを与えた可能性があるかに対する考察など、研究者がデータに与えている影響に対する省察を含んでいる

結論

- 結論は、この研究の主たる結果を述べ、この研究が当該分野においてどのような新たな知見を加えたかを強調する

注) Anderson C. Presenting and evaluating qualitative research, American Journal of Pharmaceutical education 74(8), 1-7, 2010に掲載されているチェックリストを著者が意識したものである。

適切な表現だと思うが) という質的研究の特徴が損なわれてしまう。

査読の場合には、上記に加えて、このセクションで書かれている研究疑問が、学術的あるいは実践に対し興味深く探究の価値があるかも評価する必要がある。

方法では、なぜ数ある中その質的方法を選択したのか、その研究方法が研究テーマの探究に適し

ていることを述べなければならない。たとえば、BMCのQualitative research review guidelines—RATS³⁾を参考に考えると、インタビューという方法で探求するのに適した現象として、経験、認知、行動、実践や臨床、プロセスが考えられる。フォーカスグループの場合は、グループダイナミクスそのものやそれを利用した話題の深まりと広がり期待する場合、センシティブでない話題の

場合が挙げられる。エスノグラフィーの場合は、文化、組織の行動、相互作用の探求に適している。テキスト分析は、文書資料、芸術作品、画像など表現されたもの、会話の分析に適している。

また、研究対象者を選ぶ基準は何か、なぜある対象予定者は研究協力への依頼を断ったのか、多様な視点を持った対象者が含まれるようデザインされているかなどを記述する。

特にサンプリング法については、質的研究で必要とするサンプル数は決して大きなものではないが、当該の対象者集団の特性を広くカバーするように工夫された方法をとる必要がある。その方法について述べる必要がある。たとえば、サンプリングの方法には、意図的サンプリング、コンビニエンスサンプリング、理論的サンプリング、マキシマム・バリエーション・サンプリングなどの方法がある。さらに、通常サンプリング法ではアプローチが困難な人や集団（たとえば稀少難病患者、性的マイノリティ）を対象に質的研究を行おうとする場合は、たとえば団体を通してそのメンバーからボランティアを募る場合も考えられる。いずれにせよ、準拠したサンプリングの方法にそってどのように具体的にサンプリングしたのか、透明性を高める記述が必要である。さらに、通常サンプリングと分析は、循環的に繰り返される関係にある。一定数をサンプリングし、データ収集をして、分析をする。その分析結果をもとに再度必要な対象者を求めてサンプリングを行う。いつか分析を終了させ、これ以上新たなデータを必要としないと判断するときがくる。そこでサンプリングを終了させるのであるが、その判断の根拠を示す必要がある。

サンプリング終了の理由は理論的飽和化と表現されることが多いが、著者は、単に新しいカテゴリーの出現の有無というより、それが仮説的理論の完成度にどの程度本質的な貢献をするかだと考えている。また、仮に完成度を数%上げるために、さらに何人もの適切な対象者を探しインタビューするのは、研究効率が著しく悪い。した

がって、現実的には、現状の仮説的理論の完成度・オリジナリティと新たなデータ収集のコスト（時間、費用、労力）との兼ね合いなのだと考える。仮説的理論の完成度とオリジナリティを、対象とした現象と既存の関連した理論や知識体系を踏まえて判断すればよいのではないだろうか。

さらに、インフォームドコンセントの方法やデータの管理、匿名性の保障など倫理的配慮について、データの記録の方法、文字化の方法などについても記述する。表1では、はじめに（イントロダクション）に位置付けられているが、方法で書くのがふさわしいであろう。

データ分析に関しては、より具体的なチェックポイントをSocial Science & Medicineのガイドラインが示している⁹⁾。そのガイドラインでは、分析プロセスの透明性を高めることを求めている。とりわけ質的研究は、概念や理論の生成を特徴としているので、どのようにしてデータからそれらが生成されたのかを説明する必要がある。そのため、大きく「どのように分析が行われたか」と、たとえばデータを使う際の選択が恣意的にならないように保護する手立てといった「分析の厳密さ（rigor）の確保」の2つの観点から、ポイントを挙げている。

まず、「どのように分析が行われたか」では、

- ① どのようにしてデータからテーマ、概念、カテゴリーが生み出されたか、
 - ② 分析はコンピュータソフトを使って行われたのか。もしそうであるなら、どのソフトをどのように使ったのか、
 - ③ 誰が、どのように分析に関わったのか、
- を記述することが求められる。

また「分析の厳密さ（rigor）の確保」として、トライアングレーション、評価者間信頼性、研究メンバーや外部専門家によるチェックなど、厳密さを確保するために講じた手立てについて書くことを求めている。また、研究者自身のポジション、たとえば調査の場や対象者との関係性などを明確に記述する必要がある。とりわけ、研究に対

する自分の役割、研究上で起こりえるバイアスや影響について記述することである。

質的研究の強みを発揮するには、データが常にそれが生み出された文脈の中で理解されていなければならない。その強みを生かす結果の提示が求められる。表1のガイドラインに示されているのは、十分なデータの提示、あてはまらない事例や否定的な事例の提示、先行研究や理論的文脈に位置付けた結果の提示や考察がなされているか、である。なお、結果と考察が分けがたい場合があり、その場合は、考察に含めるべきポイントが結果とともに述べられる。より具体的なチェックポイントをSocial Science & Medicineのガイドライン⁹⁾をもとに述べていく。

そのガイドラインでは、「文脈」と「データ」の提示の2つに分けて述べられている。まず、文脈に関しては、研究は明確に文脈に位置付けられなければならない。そのポイントは3つである。

- ① 場（セッティング）と対象者（研究参加者）について適切な情報を提示する必要がある、
- ② 研究対象の現象は社会的文脈に統合されて説明される必要があり、抽象化したり脱文脈化して記述するのではない、
- ③ データやデータ分析、したがってそこから得られた結果には何らかの研究者の影響が及んでいる。それを特定し、考察する必要がある。

ここで③についてさらに追加説明しておきたい。それは、そもそもインタビューでの語りをどのように認識するか、と関連するからである。たとえば、対象者は常に真実を語るとは限らず、研究者が望む物語を語ることもある。そもそもインタビューで語られた物語は、インタビューイーとインタビュワーとの相互作用のもとで構築された物語だと考えられる。したがって、研究者は、感情や声のトーン、表情や動作など非言語的コミュニケーションを調査の文脈や状況から感じ取り、対象者が何を述べたかのみでなく、どのように物語を構築して語ったか、その際に聞き手である研究者の影響が感じ取られたかなどの観点から

データや分析結果を検討する必要がある。研究者がもしそのフィールドや場と関連した役割（たとえば医療関係者、教員、養護教諭、カウンセラーなど）を持っている場合は、とりわけ注意が必要だし、影響の可能性が述べられる必要があるだろう。聞き手の影響自体は、避けられない。したがって、調査において著しい影響を避けるためにとった工夫、それでも可能性のある影響について吟味し、記述すると読者の理解が深まる。書くためには、インタビュー等によりデータを収集する際に、これらの点をメモしておく必要がある。

結果のセクションでデータを提示する方法については、

- ① コードや概念、カテゴリー、あるいはテーマを示すにあたって、読者が、それらが抽出あるいは生成された根拠となるデータの範囲を理解できるような方法で、適切な個所で引用やフィールドノート、あるいは他のデータを示す必要がある。コードや概念、カテゴリーの詳細は一覧表として、カテゴリー間の関係は構造やプロセスの関連図として示すとわかりやすい。
- ② データと解釈すなわち研究者による分析が、区別できるように明確に記述する。
- ③ データの収集とデータの解釈、つまり概念やカテゴリーあるいは理論の生成の間で繰り返されるプロセスを明確に述べる。たとえば、グラウンデッド・セオリー・アプローチでは、新たなデータが得られるたびに行われる、継続的比較分析、ある事例から見出した概念と別の事例で見出した概念の比較などが当てはまるだろう。
- ④ 読者が提示されたエビデンスと結論（あるいは妥当性）との関係について納得するように、十分なオリジナルな根拠が示されなければならない。
- ⑤ 結論の誤りを示す可能性があるケースやエビデンスについても、隠さず適切に考察すべきである。すなわち、結果として得られた

概念間の関連図や理論にあてはまらない事例があったとしても、無視するのではなく、取り上げて適切に考察を加える必要がある。例外についても十分に吟味したことを示さなければならない。

最後に考察である。ここでは「How to write an effective discussion」から引用して⁹⁾、何を考察に入れるべきであり（表2）、避けるべきポイントは何か（表3）を提示する。質的研究に特化したものではなく、量的研究を意識して述べられた考察のポイントであるが、説明を要しないほど明瞭で、参考になる。表2の7つの要素を質的研究の場合に置き換えて、どのように記述するかを考えると考察が書きやすくなると思う。少なくとも、自分の研究で得られた知見が、どの程度妥当なのか、どの程度重要でどこにオリジナリティがあるのかを、既存の知識体系の中に位置づけながら考察を書く必要がある。“新しい概念や理論の生成”（実際は仮説的理論生成が適切だと思う）

といえども、知識の離れ小島であってはならず、知識体系との架け橋がなくてはならない。そして、当該の問題解決に向けて、養護実践や学校保健の取り組みに対し、結果からどのような示唆が得られたかを述べる必要がある。

質的研究に限ったことではないが、はじめに（背景・文献レビュー、意義、目的、方法の選択理由）、方法、対象者、サンプリング、結果、考察は、一貫性が保たれてなければならない。簡略化すれば、目的は質問であり、結果はその答えであり、考察はその答えがどの程度妥当だと言えるのか評価することである。

IV おわりに

本論文はAmerican Journal of Pharmaceutical educationの質的研究論文のチェックリストを軸として、BMCやSocial Science & Medicineのガイドライン等も参考にしつつ、質的研究論文を執筆する著者とその投稿原稿を査読する雑誌編集委

表2 考察に含めて書くべき要素

- ① 研究の主な結果を記述する
- ② 結果が持つ意味や重要性を説明する
- ③ 研究の結果を同様の他の研究や理論（文献）と関連付けて述べる
- ④ 結果に対する別の説明あるいは別の解釈の可能性について吟味する
- ⑤ 結果の臨床（あるいは現場）への適用可能性を述べる
- ⑥ 研究の限界に対する認識を述べる
- ⑦ 今後の課題に対する示唆を述べる

注 Hess, DR.: How to write an effective discussion, Respiratory Care, 49(10) 1238-1241, 2004を著者が意識し、若干の修正と加筆を行った。

表3 考察で避けるべき要素

- ① 結果の過剰な（詳細すぎる）記述（冗長）
- ② 正しいという根拠（文献など）が示せない推測（過剰な推測）
- ③ 結果の重要性の誇張
- ④ 本題から離れた記述（脱線）
- ⑤ 他の研究論文や研究者に対する行き過ぎた批判や攻撃
- ⑥ データで支持されていない結論
- ⑦ 覚えておいてほしいこと（take a home message）を述べる（これは結論へ回すべき）

注 Hess, DR.: How to write an effective discussion, Respiratory Care, 49(10) 1238-1241, 2004を著者が意識し、若干の修正と加筆を行った。

員のためにチェックリストを示し、解説を加えた。しかし、質的研究方法は、多様であり、方法によって論文のスタイルは随分と違ったものになると思われる。また、方法により研究のまとめ方のコツは異なるにちがいない。したがって、量的研究とは違って、標準的な質的研究論文のまとめ方を提示するのは難しい。まして、この小論で述べられることは限られており、読者の理解をどの程度促進できただろうか。質的研究法のテキストもかなりの数が出版されているので、実際に取り組む際は、それぞれの方法に関するテキストをぜひ参照していただきたい。幾つかの点については、私見を述べたので、既成のテキスト等の見解と比べながら、注意して批判的に読んでいただきたい。

3度にわたり量的研究、質的研究の進め方、まとめ方について書く機会を下さった本学会誌編集委員会の先生方に感謝の意を表します。

文献

- 1) Green J. and Thorogood N: Qualitative methods for health research (2nd eds), 254-270, Sage Publication, Newbery Park, CA, 2009
- 2) 能智正博：質的研究と臨床・社会心理学、能智正博・川野健治編・秋田喜代美・能智正博監修、はじめての質的研究法 [臨床・社会編]、3-38、東京図書、東京、2007
- 3) BioMed Central Qualitative research review guidelines—RATS
<http://www.biomedcentral.com/authors/rats> (2014年10月30日にアクセス)
- 4) The International Journal of Tuberculosis and Lung Disease Guidelines for preparing manuscripts on qualitative research in the IJTLD
http://www.theunion.org/what-we-do/journals/ijtld/body/IJTLD_Guidelines_for_Qualitative_Research.pdf (2014年10月30日にアクセス)
- 5) Social Science & Medicine Guidelines for Qualitative Papers
<http://www.journals.elsevier.com/social-science-and-medicine/policies/guidelines-for-qualitative-papers/> (2014年10月30日にアクセス)
- 6) Anderson C: Presenting and evaluating qualitative research, American Journal of Pharmaceutical education, 74 (8), 1-7, 2010
- 7) 林葉子：方法論としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ, Sociology today, 18, 56-63, 2008
- 8) Hess, D.R.: How to write an effective discussion, Respiratory Care, 49(10), 1238-1241, 2004